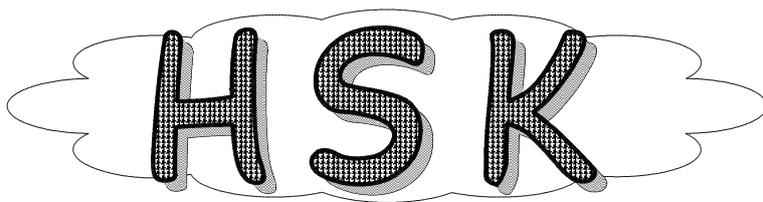


一九九四年八月四日 第三種郵便承認
H S K 毎月十二回 (一・三・五・八・十・十三・十五・十八・二十・二十三・二十五・二十八日) 発行



季刊わたぼうし

NO.86
'10秋'11冬

お出かけ企画
検証・富山市路面電車、環状線の乗車体験

今回の目次

※お出かけ企画 検証・富山市路面電車、環状線乗車体験

- ・企画の経緯、環状化とは 2
- ・新しくなりつつあるJR富山駅 3
- ・環状線に乗車・新富町電停 4
- ・さあ、電車に乗車 5
- ・無事に電車へ乗車 6
- ・グランドプラザ前で乗り換え 6
- ・車窓から見る荒町電停 7
- ・地鉄ビル前で下車 8
- ・取材報告の参考資料 9

※第55回石川県身体障害者社会福祉大会

- ・記念講演「地域で生活したい！」II
講師：平井 誠一氏 10
- ・自立生活体験室の紹介 11

※マイ・ブックスルーム

- ・恋に導かれた観光再生 15

※地域のホットなニュース

- ・松元聖子さん講演&伸之介さんの似顔絵描き 16

電線の

雪太りして

大たるみ

敏裕



この機関紙は障がいのある人、ない人が自由に考えを出し合い、主義・主張を越えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

お出かけ企画 検証・富山市路面電車、環状線の乗車体験

【企画の経緯】

今回の企画は前号までの「ライトレールで行く富山市岩瀬浜」から引き続いております。

前号の「岩瀬浜散策」の記事を作成するため、もう一度ライトレールに乗車して岩瀬浜へ行こうと思い、自立生活支援センター富山(以下、支援センター)に相談をしました。

相談の結果、岩瀬浜へ行って取材しても得られるものがないので、現在、支援センターが取り組んでいる「富山市路面電車セントラム」に乗って、体験報告をした方が良いのでは? という助言をいただき、さっそく取材を行いました。



セントラムの新型車両・JR富山駅前

【目的】

①路面電車セントラムが環状化されたことによって、障がい者が利用しやすくなっているかを体験し、確かめて報告する。

②車いすの人たちが利用しやすい公共交通機関、街づくりについて考えるきっかけにする。

【環状化とは?】

「環」とは「一回りする」という意味で、「環状線」とは市内を一回りして走る電車・バスなどの路線のことを言います。

富山駅前→丸の内→大手モール→荒町→富山駅前の約3.5kmを反時計回りで環状運転され、環状線用車両の愛称も一般公募によって募集され、選考の結果「セントラム」という名称に決まりました。2009年11月に白・銀・黒の車両が南富山車両基地に納入され、12月23日から営業運行が始まりました。

【取材の日程】2010年5月25日(火)

【取材者】

「HSK季刊わたぼうし」編集者・桶屋 善一

【取材協力】

「自立生活支援センター富山」職員2名



新しくなりつつあるJR富山駅

今回は以前の富山駅とは違い、新幹線が出来るまでの仮のホームに降りたことでした。

北陸新幹線の開業に合わせ、駅舎の改築工事が始まったようです。「北回り新幹線」と言われた時代から40年余り経って、北陸に新幹線が走る日が現実になりつつあるようです。

この改札口は以前の古い駅舎とは、位置も広さも変わっていなかったなので、違和感なく通り抜けが出来ました。



改札口



自動券売機で切符の購入

新しい障がい者トイレ



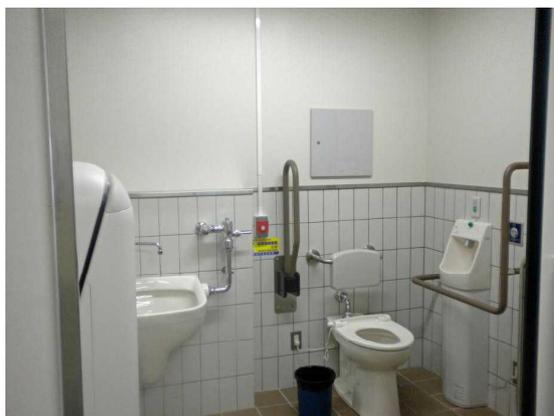
発車電車の時刻案内



広く美しいトイレですが、私にとっては少し便座が低いように思います。



この改札口を通過してホームへ



環状線に乗車・新富町電停

～富山地方鉄道・地鉄市内環状線～



新富町電停ホーム

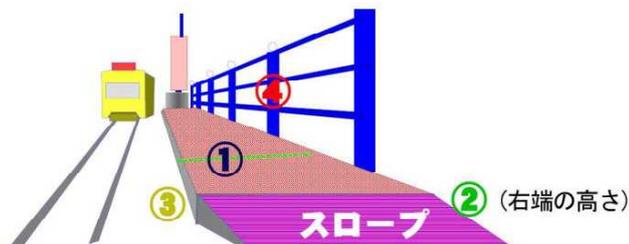


新富町電停ホームのスロープ

上の2枚は新富町電停のホームです。見てわかるように狭いホームでした。ホームの幅は120cm。この電停はまだ広く荒町、西町の電停は90cm以下の広さしかありません。

電車が新富町電停に到着・狭いホーム

ご覧のようにホームがとても狭い電停です。



場 所	①	②	③	④	その他
データ (cm)	ポール外側 120cm	1 0 cm	1 1 cm	有 無	スロープ 有 無

新富町電停の調査図面表(改修前)

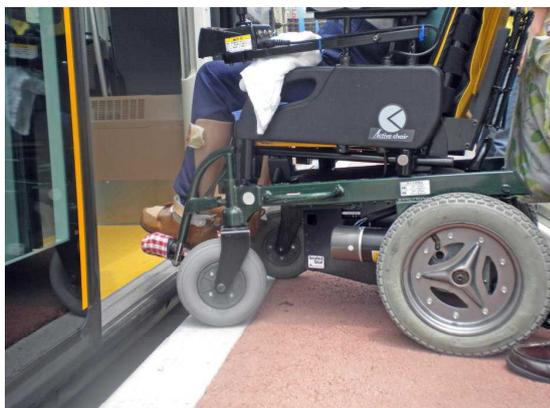
(図面表提供: 自立生活支援センター富山)

さあ、電車に乗車

これから新富町電停で電車に乗車しますが、この電停はホームと電車の段差が高いので乗車するのに苦労しました。乗務員、お客さんたちに手伝ってもらって乗車が出来ました。順を追って見て行きます。



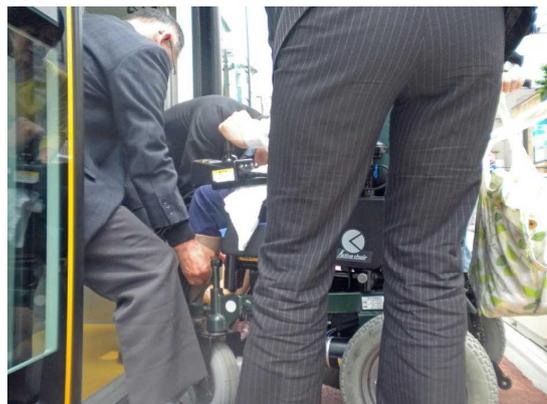
①乗務員と介助者



②ホームと電車の段差 約15cm



③車体とホームの隙間に脱輪



④3人で持って電車に乗せています。



⑤前輪を持ち上げて乗せます。

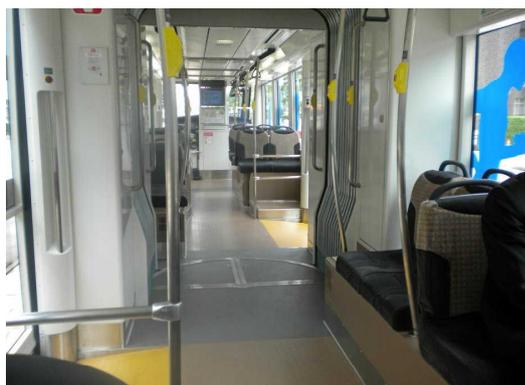


⑥電車に乗車が出来ました。

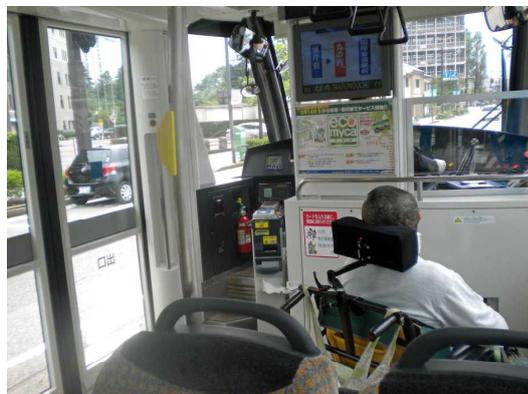
無事に電車へ乗車

無事に乗車が出来ましたが、とても怖い思いをしました。助けて下さった皆さんに感謝します。ありがとうございました。

電車の車内ですが、車いす専用席が一席あり、車内の停留所の案内もライトレールと同じデザインになっています。



セントラムの車内



車いす専用席が一席あります。

グランドプラザ前で乗り換え



グランドプラザ前のホーム



床に設置の車いすマーク



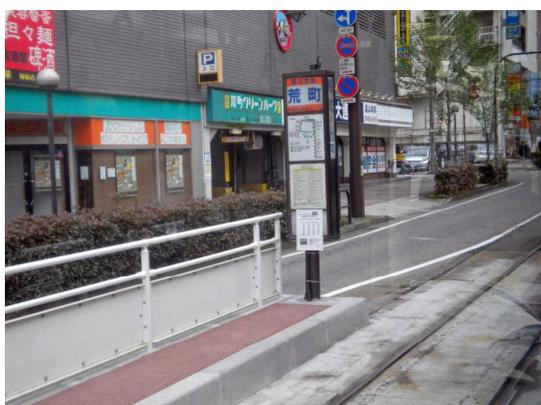
ホームとの段差はあまりない。



この停留所は比較的新しくバリアフリーになっており、段差もなく、ホームが広くて車いすの乗降が可能です。

ここで電車を乗り換えて、乗り降りが困難な停留所で降りてみました。

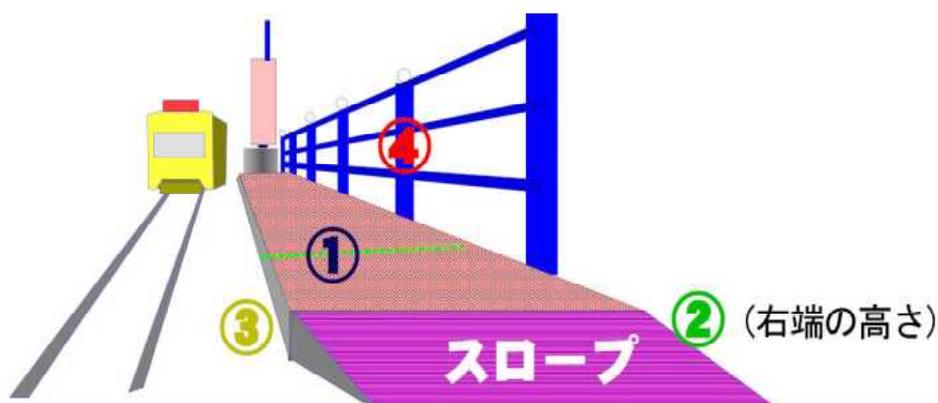
車窓から見る荒町電停



グランドプラザ前で乗り換え、地铁ビル前に向かう車内で、最もホームが狭い電停「荒町」を紹介されました。

このホームの幅は、車いす利用者の単独乗車はとても危険です。

環状線取材したニュース番組のDVDを見ましたが、取材された富山市は「ホームを広くすると車道が狭くなり、歩行者も車両にも利用しやすい環境を目指したい」と語っており、車いすや高齢者のバリアフリーの対応に苦慮しているようです。



場所	①	②	③	④	その他
データ (cm)	ポール外側 109 cm ポール内側 90 cm	20 cm	19 cm	有 無	スロープ 有 無

荒町電停の調査図面表(改修前)

(図面表提供: 自立生活支援センター富山)

地鉄ビル前で下車

乗車体験の最後の停留所です。この停留所は段差もなくスムーズに乗降が出来ました。しかし、ホームの幅が狭く、運転を誤ると脱輪の危険があります。



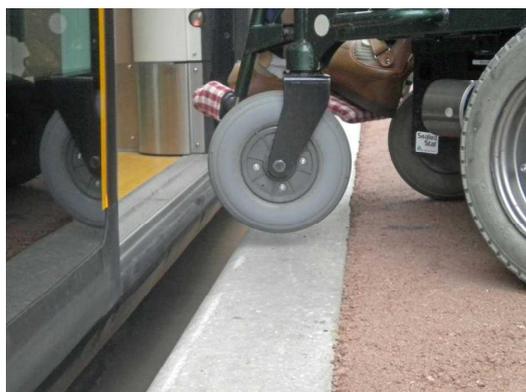
電車が通過後、狭いスロープ



段差もなくスムーズの電停。幅18cm

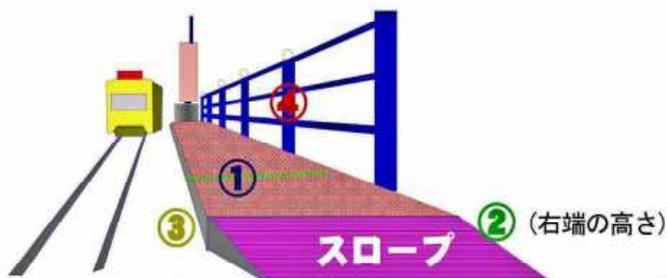


代わりに電車が入る。間が狭く怖い。



無事に降りられました。

この地鉄ビル前は、代わりに電車が通過するときは怖いので、静かに通過するのを待つだけでした。本当にホームの幅を広げていただけることを願います。その後、支援センターに帰って報告と反省を行いました。

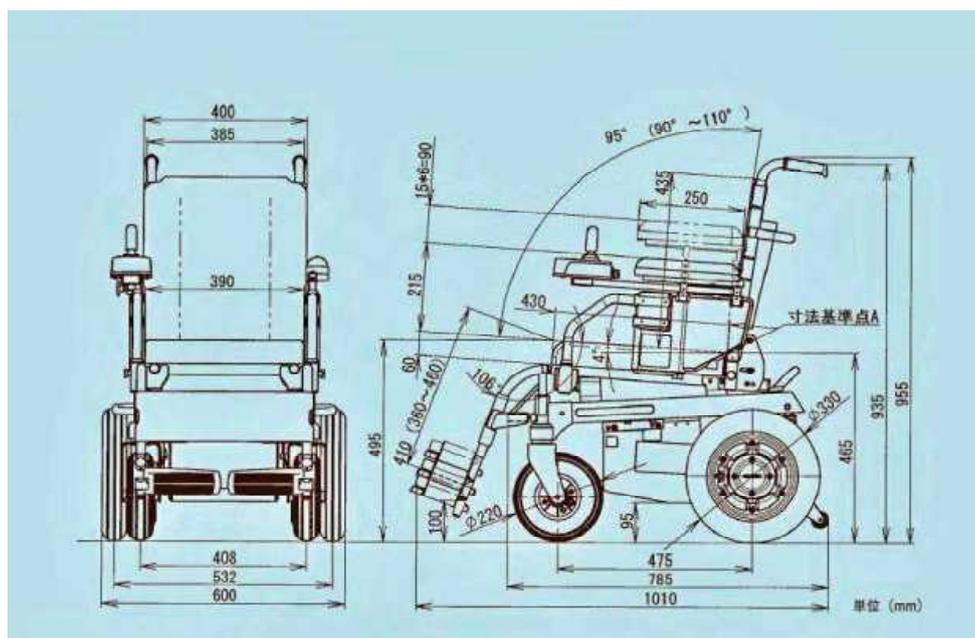


場所	①	②	③	④	その他
データ	ポール外側			有	スロープ 有 (無)
(cm)	ポール内側 9.8 cm	1.8 cm	2.1 cm	(無)	

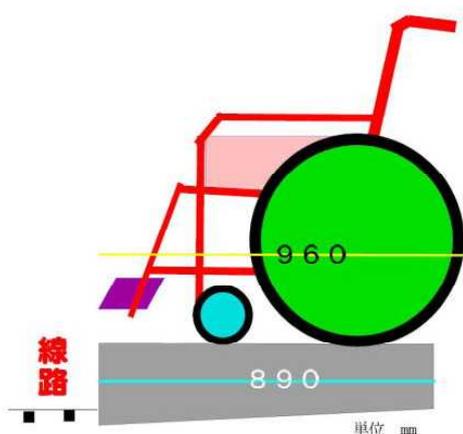
地下鉄ビル前電停の調査図面表(改修前)

〈資料、図面提供: 自立生活支援センター富山〉

取材報告の参考資料

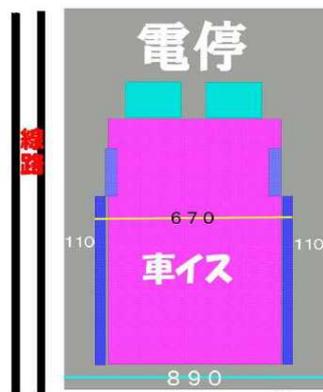


取材者使用「電動車いす見取り図」(株式会社「今仙技術研究所」HPより掲載許可済)



横になると後輪と足の先が出てしまう

電停を横から見た図面



ガードレールが着けられていない状態。

電停を上から見た図面

狭い電停での検証

〈上の図面は改修前のものです。資料提供: 自立生活支援センター富山〉

環状線乗車体験の編集を終えて

環状線乗車体験を行ったときは、何も理解せずに終わってしまいましたが、体験を思い出し、ネットなどで調べて自分なりに問題を把握して紙面にしてみました。

新しく車両が導入される割には、道路と環状線の線路、ホームなどの設備環境の整備が立ち遅れているように思います。ホームと車両の段差、ホームの広さは乗車体験して安全・弱者への配慮が欠けているように思えます。

大きな事故が起こってから対策を考えるのではなく、計画の段階から利用する当事者を交えて意見を取り入れ、障がい者・高齢者などの要援護者が利用しやすい電車にして欲しいと思います。

この体験を生かし、昨年4月より七尾市のコミュニティバス「ぐるっと7」の停留所と地域のつながりの取材に取り組んでおります。

最後に、取材にご協力いただいた自立生活支援センター富山に厚くお礼を申し上げます。

第55回石川県身体障害者社会福祉大会 ＝記念講演「地域で生活したい！」＝

－生活、就職、結婚、趣味、自分のしたいことⅡ－

- ・主 催：石川県身体障害者団体連合会
- ・日 時：2009年11月15日(日)
- ・場 所：コスモアイル羽咋
- ・講 師：NPO法人自立生活支援センター富山
理事長 平井 誠一(ひらい せいいち)

講師の経歴等は講演内容を参考にして下さい。



写真提供：自立生活支援センター富山

～以下は前号からの続き～ ↓

・地域生活に向けた支援

僕は一人暮らしをしたい障がい者の人たちには「人を支援する」と一応言いますが、「人を支援する」とは何なのか？と言われてれば、僕らの支援センターでは自立生活体験室を持っています。

地域で生活をしたい人は、自立生活体験室を使ってもらって、自分で生活体験をしてみようということとしています。自分である程度自信をつけてもらってから、それが親に対して、家族に対して言える言葉として出てくるものもあります。その一方で自立生活体験室をしている場を親なり、家族に見ていただいて「そういう感じで生活をしていくのですよ」ということを、見てもらう中で、家族なり親の方が納得されて「出ても良いよ」と言われる方もおられます。そういう中で重度の方が

地域で一人暮らしを始めて行きます。

もう一つは、これは今のいろんな制度が出来てくるなかで、「弊害」と言ったら良いですかね。「弊害」ですね。僕らからしたら「弊害」なものなのですけれども。実は支援費制度、障害者自立支援法が出来たなかで「介護がお金」となるということがあります。制度的にもなってしまったなかで、これが逆の効果を生んでしまった面があります。つまり、ヘルパー事業所からすると「障がい者はお金になる」ということで、施設から出たい障がい者を丸抱えにするケースがありました。

丸抱え、一人を丸抱えにすると1ヶ月にいくら入るかと言いますと、多い人で一人の障がい者を丸抱えすると50万円の収入がヘルパー事業所に入ってきます。これを利用する障がい者側に何が起こるかと言いますと、確かに地域生活は実現できるのですが、今、行政とか担当のヘルパー事業所からこちらに相談が来て、今、関わっているところですが、丸抱えにされると1ヶ月いくらで生活しているのか、行政に対してどういう書類を出していけばよいのかということ、障がい者側が考えておらず、それが今、生活に困る状態になって来てしまっています。

やはり、地域生活を行うという意味では、障がい者側にもいろんなことを身につけていく必要があるし、障がい者側も責任を持って地域の中で生活していかないといけない、ということ、身に付けていってもらい必要があるのではないかということを感じています。

ヘルパー事業所が儲かるからといって、丸抱えして生活の全部を管理していくのも、それは将来的に言えば、そのヘルパー事業所が

なくなった時にその人が困ってしまう結果になるので、やはり一人一人の障がい者の人たちが、地域で生きるために何を見つけていくのか、何を求めていかなければいけないかを、きちんと教えていくことが必要ではないかな、と思っています。

そうしたなかで、丸抱えにされていた障がい者の人でケアプランなどを作っています。ケアプランというのは、一週間でどういうヘルパーさんを入れていくか、自分がどういう生活をしたいから、どういうサービスを使おうかということでケアプランを作ります。その中でその人が泣き始めたのです。自分は床屋とか近くのコンビニとか散歩をしたりしたかったのに自分の持っている時間で足りなかった、と言っていました。

ヘルパー事業所の丸抱えの中では一言も自分は言えなかったということ言われて、今は少しずつ自分のしたいような生活に近づけながらヘルパー事業所をいくつか入れる形で実現を目指しているところです。

あと一番多いのは「施設から出て働いて結婚したい」と言われる方が多いです。施設から出ることは意外と簡単ですが一番難しいものは結婚ですね。これだけはなかなか支援がそんなに簡単なものではないことがあります。働くというのは働く所を一緒に探しながら、結構、実現して来ている人たちがおられます。

ある方ですが、僕と同じ脳性麻痺の方で施設から出るときは、歩いておられました。車も持っておられて、施設から出てから結構、粘り強くハローワークに通われて仕事を見つけて来られました。車で通うようになったのですが、2次障がい、というのは僕もそうなのですが、脳性麻痺の方は2次障がいがあります。「2次障がい」というのはどういうことなのかと言いますと、首の頸椎が圧迫されて

きて、歩けなくなったりとか、手が動かなくなったりとか、話せなくなったりといろいろあるのですが、僕は2年半前になり、全面介護になってしまいました。

全面介護になり、しびれと痛みが全身に走るようになって「これは、もう寝たきりかな」と思っていたら、金沢の金大病院に上手に手術をする先生がおられるということで、その先生に頼んで手術をしてもらいました。今は手が動く状態、ご飯を食べたり、トイレは尿瓶で取ったりして、自分である程度出来るところまで回復してきました。首にはボルトが8本入っていますので、こういう動きが制約され、うつむくのも制約されます。

2次障がいには自分たちからしたら、避けて通れないもう一つの障がいが出てきてしまったのです。その支援している方も、同じように出てきてしまいました。金大で手術を受けて、現在は車いすでまた全国を飛び回っています。何か、サッカーが好きな人で電動車いすサッカーとか、そのようなものを行っているみたいです。

彼が退院してから、また普通の会社に勤めたいと言われて、会社へボランティアを使って働くようになりましたが、やはり、ボランティアだと毎日通勤が出来ないので、公共交通機関を使って通勤が出来ないかと、バス会社と話し合いをしました。それによって実現したのは、バス会社が車いすのまま乗れるスロープのバスを2台導入してくれて、それで通えるようにはなったのですが、残念ながらこの時勢で会社側が解雇したわけです。

せっかく通勤の手段が確保できたのに、働く場がなくなってしまったのです。でも、彼は今もめげずにハローワークに通い続けていますが、やはり、なかなか難しくなっているということがあります。

・地域生活に向けた支援

もう一人の方は、さっきお話ししました重度の障がい者の方でご飯・トイレ・移動のすべて人の手を借りないと生活が出来ない人でした。その人が「施設から出て生活がしたい」ということで、私たちのセンターに相談に来られました。もう一方でその方のお母さんとお母さんの知り合いのおばさんたちも来られて、何を言われるかと言いますと「施設から出さないで下さい。出さない指導をして下さい」と言われるので、後から仲間は怒っていました。「ここは自立を教えている所だから、自立をさせないための支援する場ではない」と言って怒っていたのです。その彼が自立体験室を利用しながら、地域で生きて行くための知恵とか、いろいろなものを身に付けていこうということでやり始めました。そういうなかで、ちょうど今頃(秋)だったと思いますが、寒い時期でストーブをつけるのですが、その方はすべてのことが人の手を借りないとできないのです。ストーブは時間が来ると切れてしまいますよね。それをヘルパーさんが出るときに、時間延長をして欲しいと言わなかったために、途中で切れたのです。そこへお母さんが来られて「あんたら、何ていうことをやらしているのだ」と言われて怒られました。でも、僕らは地域で生活するということは、こういうこともあるのだよ、ということも本人にも解って欲しいし、本人が「ストーブの延長ボタンを押して欲しい」ということを言えないと、地域で自立するどころか、病気になりますよね。

そういうことを体を持って覚えて欲しいことを言いました。施設から出てからではダメなのです。出る前に覚えてもらわないと、自分たちが地域で生きていくための知恵や、そういうものが身につかないのです。というこ

とを言ったときに、お母さんにご理解してもらって「わかりました。」となりました。

その方は「地域に出たい」と言われてから、1年半かけてやっと一人暮らしを出来るようになりました。長かったのですが、でも彼なりに地域で生きて行くための覚悟なり、知恵なりを身に付けて、地域へ出られたことは僕は良かったな、と思っています。

その彼は何が好きだったかという、F1が好きでした。F1になるとよくテレビにかじりついたのと、阪神ファンだったので、何かお母さんも好きなのか阪神ファンのユニホームを買って来て着せたりとかしていました。彼の夢は施設から出て地域で生活したい同じ仲間の相談に乗りたいということで、地域で頑張るって生きようになってきたのですけれども、4～5年も地域で生活しておられましたが、残念ながら膀胱ガンになられて亡くなってしまいました。

その彼から亡くなる前に電話をいただいて「話をしたい」と言われ、会いに病院へ行ったのですが、残念ながら最期に間に合わなかったのと、もう危ない状態だったのでちょっと何を言われているのか聞き取れなかったこともあって、残念ながら亡くなって逝くところを見送る形になってしまいました。

彼が亡くなってから、お母さんが「彼の持っているDVDがいくつかあるから、そちらで処分してくれないか」と言われて、お母さんから預かってDVDをチェックして見ました。彼の文章が幾つかありました。その中で彼が何をしたかったということが、少し書いてありました。やはり結婚したいとか、もう少し自分がいろんな友だちを作って、いろいろ活動をしたかったということが書かれていました。

彼と付き合いながら、よく福祉の分野で

「ゆりかごから墓場まで。」と言われますけれども、僕らは「途中から関わって墓場まで」を支援だというように思っています。

★「人の死と向き合うこと」

どうしてもいろんな支援・相談に関わっていくなかで、亡くなっていく人もおられるわけですが、けれども、ある医者が僕たちにこういうことを言われました。「人はどこでどこにいても死ぬのだから、その人がどんな生活をしたか大切」というように言われました。一言で「その人がどこで生活をしたか」ということであって、決して施設にいるから死なないのではなくて、人はそのうちに亡くなるのだよということ言われたわけです。

やはり「生きている限り、人は死を迎える」ことになっていくわけです。死を迎える人たちは、これは年齢順ではないのです。僕らも今まで関わってきたなかで、やはり20代の人でも亡くなるし、30代の方も亡くなるし、2週間前ですが62才の方も亡くなりました。

そういうなかで、障がい者の人たちの支援を考えたときに「僕らが何が出来るか？」と言われたときに、決して死を迎えている人たちの医学的な何かに関われるわけではないし「生きることを長引かせるようなことを出来るか」と言われると、出来ないわけですね。どちらかというと、やはり僕らには無力だなと。死を前にしたときに、どうしても無力だとしか感じられないところがあります。ただ見守って励ましていくか、というところがあるのですが、でも僕は他界していく人たち、死を迎える人たちに関わることも一つの支援だと思えます。その障がい者の人たちがどのように生きたのか、どのように生きてきたということを、いろんな人に語ってあげることも支援なのではないかと思っています。

「地域で生きる」ということは、いろんなことがあるけれど、やはり自分がどう生きていきたいか。どのように自分が地域の中で暮らしていきたいのかということが、やはり大事にされないといけないのではないかと思っています。

僕は人の支援に関わる中で最初の方に話をしましたけれども、僕が地域で生活をしたときに、アパートで一人暮らしを支えてくれたおばちゃんたちのことをずっと今でも忘れていません。そういう状態があったから今まで生きてこられたのだと思うし、今の自分があると思っています。

おすぎとピーコのピーコさんを富山に迎えたときに、ピーコさんが言われたことですが「人の恩は受けた人に返すのではなく、次の人に返そう。つまり僕はおばちゃんから恩を受けたけれど、おばちゃんに返すのではなくて、支援の要る人に返していくことが必要なのではないか」と言われました。そういうことが、僕が今後やっていきたい支援の中身なのかというように思います。

最後に僕の知り合いのお坊さんが残された言葉を紹介したいと思います。罪を犯し保護観察を受けてきた、十代の子供たちをこのお坊さんと僕のやっている作業所で受け入れを一緒にして来ました。そういう子供らと付き合いながら、お坊さんとの付き合いがありました。そのお坊さんが2～3年前にガンで亡くなりました。

僕にしたらいろんな人と関わってくれるきっかけにもなったし、保護観察を受ける子供らは健常者だったので、僕も健常者の子供らと関わる中で僕が考えさせられたこともあります。親子関係とか学校の問題だったりしました。その人の言葉ですが。

自らの人生だけが
人生ではない。
他の人の人生も
私の人生

思いやりが他の人の人生を
輝やかせるだけでなく、
自らの人生も輝やく。

マイ・ブックスルーム

恋に導かれた観光再生

＝奇跡のバリアフリー観光誕生の秘密＝

中村 元 (ナカムラ ハジメ) 著

発行:長崎出版 定価:¥1,470

☆「パーソナルバリアフリーセンター基準」で対応

あなただけのバリアフリー基準を用意しています。視覚障がい者と車いすのバリアフリーの視点は違い、車いすであったとしても立てる人、立てない人、またその人の「行きたい」気持ちの有無でバリアフリーの基準は変わってきます。私たちは障がいの数だけ障がいの種類があると考えます。そのためお客様ひとりひとりのバリアフリー基準でアドバイスさせていただきます。

パーソナルバリアフリー基準は伊勢志摩バリアフリーセンター独自の指針です。旅行の為に介助式車いすを購入し、歩行可能なところはなるべく自力で歩きたい旨をメールしたところ、すぐに（とにかく対応が速いです）お電話をいただき、直接アドバイスいただけました。後にバリアフリーの情報が書かれた資料や観光のしおり等沢山無料で送っていただきました。昨年アドバイスのおかげで快適な旅ができ、とても感謝の気持ちで一杯でした。

という文章を残して他界されました。僕らはやはり障がいの者の支援だけではなく、いろいろな人と関わりながら「生きているんだ」ということを思っています。今日は解りにくいお話になったかも知れませんが、僕のお話を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

～講演の終了～

今年再び12月に昨年行った場所を訪れる機会があり、新しく行く場所も増え、又センターのアドバイスを求めると、何度も何度もメールでアドバイスをやりとりしていただきました。スケジュールの中で2日目離島に渡ることになっていましたが、島自体アップダウンのある島で車いすでは難しいことが分かり、島を渡る午前中は私だけ三重県に残り、待つことになりました。待つ間、地元のボランティアを派遣して下さり、鳥羽水族館に行くことになりました。前もってバリアフリーチェックをして、限られた時間内で効率よく回れるようにと研究して下さり、当日は短い時間の中で水族館内の説明やお土産選びのショッピングにも付き合ってもらって下さり、とても楽しいひと時を過ごさせていただきました。

「恋に導かれた観光再生、奇跡のバリアフリー観光再生の秘密」は伊勢志摩バリアフリーセンターの理事長である中村元さんが書かれた本です。

車いすの青年に恋した少女が、青年に気に入られようと動くたびに奇跡が起きた。人を動かし、町を動かし、行政を動かし、とうとう国まで動き出す。街づくりを実践してきた著者とその仲間の、活動記録と政策提言の書。



自立生活体験室



体験室へ入るスロープ



トイレ



寝室(和室)



台所



寝室(洋室)



浴室



パソコン実習室

この自立生活体験室の写真は、平井誠一氏講演の参考資料として載せました。編集者もここで地域生活へ向けての体験をさせていただきました。

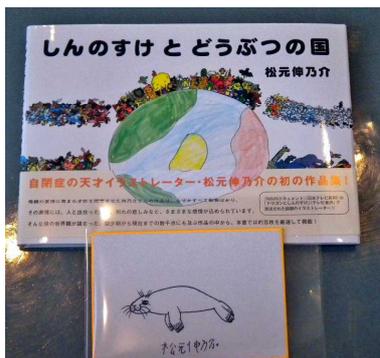
地域のホットなニュース

松元聖子さん講演&伸之介さんの似顔絵描き

昨年12月4日(土)に七尾市の青山彩光苑において、テレビ金沢でおなじみの自閉症の障がいをお持ちの松元伸之助さんの母、聖子さんの講演・本の販売・伸之助さんによる似顔絵描きが行われました。



伸之介さんが似顔絵描き中。



最新出版本と似顔絵

編集後記

明けましておめでとうございます。昨年は「HSK季刊わたぼうし」が創刊25周年を迎えることができました。これも皆様のご協力により25年、四半世紀も発行し続けられていますことを深く感謝を申し上げます。

本年は新たなスタートの年になりますが、編集者も年々体が衰え、介助量が増えて体の自由が利かなくなって来ています。しかし、電動車いすに乗って、地域へ出会い・ふれあいを求めて出かけ、バリアフリーの情報などを見つけ、紙面作りに生かしていきたいと思っております。

下の大菊は以前、私が趣味で栽培していたことを懐かしく思い出し、庭先に飾られていたので撮影して来ました。(Z.0)



七尾市今町の商店に飾られた大菊、厚物・管物 11/7撮影

年間協力会員募集中

この機関紙は障がいのある人、ない人がそれぞれの考えを出し合う中から、互いに理解を深め、共に生きる豊かな社会づくりを目的として、有志により発行しています。

つきましては、主旨に賛同して協力会員になっていただく方々を募集しています。

この会費で、在宅障がい者や福祉関係機関等に送付していますので、機関紙一部の料金ではなく、年間協力会費として扱っています。

年間協力会費：2,000円

会費振込先：郵便振替口座

振込先名義：わたぼうし連絡会

00750-6-9791

送付：春、夏、秋、冬

編集及び連絡先

連絡はzen@san9.netまで

定価二〇〇円